

解題

本書では、今後の研究の手がかりとするため、小車社とその周辺で盛り上がりを見せた幕末佐賀歌壇の活動の実態を垣間見ることのできる資料を翻刻して掲載する。

資料の利用を御許可くださった佐賀県立図書館、佐賀県立博物館、野中源一郎様、本野克彦様、山口県文書館に、また資料解説に御協力くださった井上敏幸様に、お礼申し上げます。

一、古川松根関係書簡集

まず、古川松根（一八一三～一八七二）の歌人としての交友関係を伝える書簡及び関連資料を紹介する。

翻刻にあたっては、原則として通行の字体を用い、濁点・句読点を付し、朱書きはゴチック体で表記した。改行は原資料のそれを再現している。資料群毎に配列し（出典は末尾に記載）、年代推定の根拠は各資料の後ろに※を付して記載した。

なお、長沢伴雄の和歌に付した番号は、亀井森主編の長沢伴雄歌文集『絡石の落葉』（国立台湾大学図書館、二〇〇八）で付された歌番号である。

*鈴木高輅宛古川松根書簡・古川松根宛鈴木高輅書簡等

鈴木高輅（一八一二～一八六〇）は周防宮市の松ヶ崎天満宮

の神職であり、『類題玉石集』を編纂・刊行したことで知られている。『類題和歌鴨川集』の編者長沢伴雄と彼との交流は亀井森「近世後期類題和歌集編纂の一齣」（『近世文藝』九〇、二〇〇九）に詳しく、そして高輅が佐賀歌壇の宗匠格として古川松根の名を挙げていることも既に紹介されている。本書では、彼らの交流を伝える佐賀県立博物館に存在する古川松根関係資料（各地の文人から松根に宛てられた書簡その他の資料が卷子に張り込まれている）中に残された松根宛書簡と、山口県文書館に存在する高輅宛書簡（小川五郎氏収集資料の一部）を、まとめて紹介する。

松根宛書簡②を見ると、彼らの交流は嘉永二年に始まったようだ。東上する松根が近くを通行する際高輅に使者を送ったものの、生憎留守であった。そこで翌年、松根が佐賀に帰る際に面会できるよう望んだ高輅が送ったのが当該書簡になる。

松根宛書簡③を見ると、この時の面会は無事実現したようだ。①の一枚刷りに見えるように自社の九百五十年祭合わせの歌集（⑤に一部翻刻した）編纂を図っていた高輅に対し、松根は積極的に協力した様子である。松根はまた、『類題玉石集』に対しても詠草を寄せているようだ。第一集の刊行が未だ済んでいない段階だが、第二集―結局未刊行に終わる―のための作を

松根は投稿している。そして第一集の非掲載分は『鴨川集』に廻すために伴雄の許に送られ、第二集の非掲載分はまた別の類題和歌集のために転送される、という事情が伝えられている。類題和歌集出版ブームの実態が窺える。また高輅が南里(有隣)への関心を抱いていること、そして松根の知人でもある佐賀の宮城繡介がこの時期高輅の許を訪れ、手跡が見事であることから、高輅の広島での出版の手伝いをするようになったことも見て取れる。彼らの関係については既に山崎勝昭『萩原広道』ユニウス、二〇一六)が触れているが、新たな検討材料になることだろう。

嘉永五年の松根宛書簡④から、高輅はこの時、船で移動することになった松根との面会が叶わなくなったものの、南里には会えることになった、と読み取れる。奉納歌集、『玉石集』、『鶯蛙集』、『鴨川集』などの続刊状況も窺える。防長歌壇の著名人、近藤芳樹の佐賀行の予告と、既に佐賀に戻っていた宮城繡介が彼と通じている点も書かれており、興味深い(その時の様子については総説を参照)。これに対する返答が高輅宛書簡②なのだろう。高輅宛書簡①も、近い時期のものになる。地方に根拠を置いた歌人たちが、刊行物・書通を媒介にして交流を取り結ぶ様がよく伝わってくる。

*古川松根宛中島広足書簡等

佐賀県立博物館の古川松根関係資料のなかには、中島広足(一七九二〜一八六四)に関わるものもある。高輅・松根がともに交流を持った(松根宛広足書簡②でも宮市への訪問が話題になっている)熊本藩出身の国学者が、言わずと知れた広足である。彼の刊行が実現した旅日記二作のうち、一つが『佐嘉日

記』になる。そこには大商人野中元右衛門の屋敷における松根らと広足との交流の様子が描かれている。広足の野中家宛書簡については既に拙稿「中島広足『佐嘉日記』と野中古水」(『西日本国語国文学』四、二〇一七)で紹介した。これに対して松根の許に残されたこの時の記録が③④になる。『佐嘉日記』にも取り上げられた、和歌の書付である。

嘉永三年の松根宛広足書簡①では、広足著『海人のくゞつ』が紹介されている。同書には、松根にとって幼い頃からの仲間であるが早くに亡くなっていった羽室貞風がフランス艦の長崎来航(弘化三年)に対応した際の和歌が紹介されており(二十一丁裏)、そのことが報じられている。久しく長崎で活動して対外的関心も深かった広足と、長崎警備を担った佐賀藩の松根との関係は、このとき既にそれなりに深いものだったと見える。

*重松春香宛古川松根書簡等

佐賀出身の宮城繡介が一時期領内を離れ、自らの写字能力を生かしながら高輅らの許に滞在していたことは、彼の得た紹介状等を張り込んだ「諸家書翰集」(手紙を読む会「続々名家手簡(下)」『江戸時代文学誌』八、一九九一で紹介)の内容によって先述の通り山崎が紹介するところである。

彼は佐賀では重松菅二(一八一五〜一八八八)などといい、寺子屋の先生などを務めていた。小車社の歌会には早くから名が見え、明治期も歌人として活動していた様子である。今泉蟹守(彼については後段で紹介がある)が編んだ「類題白縫集」の姓名録は、彼の数々の号を紹介しつつ、春香という名前で項目を立てている。そんな彼に松根が送った書簡・詠草書付のうち、佐賀大学地域学歴史文化研究センター所蔵のものと、本野

克彦氏所蔵のものを紹介する。

これらの書簡からは、作品や批評をやり取りする具体的な有様とともに、松根が他地域の歌人たちの動向を春香に伝えている様子が窺える（春香が長らく滞在した周防からの手紙が話題に上るほか、②に登場するのは加納諸平、⑥に登場するのは近藤芳樹か）。春香の体調不良（③）、外出不能な状況（⑭）とそんな春香を松根が励ます様も見える。春香は高い知名度を誇った歌人ではないにせよ、幕末地方歌壇の層の厚さを考えるうえで、興味深い事例ではなからうか。

「三ツ松 誠」

*古川松根宛長沢伴雄書簡等

佐賀県立博物館が所蔵する古川松根関係資料の内、長沢伴雄に関する資料をまとめたものである。長沢伴雄（一八〇八〜一八五九）は本居大平に従い、国学・和歌を修めた紀州藩士である。『類題和歌鴨川集』の編者として知られている。本資料は嘉永四年から六年にかけての両者の交流をうかがわせるもので、幕末佐賀の和歌を担った古川松根の文事の一つと捉えることができるだろう。

①は長沢伴雄が在京中に主催していた和歌結社「絡石舎つたのや」の月次題を知らせる一枚刷で、嘉永四年末までには社友へ配られたものである。この年、長沢伴雄が編集していた『類題和歌鴨川集』第三編である「三郎集」が完成している。また亀齢館は全国から送られてくる投稿歌の取り次ぎを行っていた香具屋である。

②は嘉永五年二月七日付古川松根宛長沢伴雄である。昨年（嘉永四年）に完成した「三郎集」の代金の受け取りの報告と

お礼を述べる書簡である。この年閏二月半ばには古川松根は江戸を出て、下旬に京都に到着。長沢はその前月二月二十日頃には和歌山から上京する予定だと伝えている。

また昨年につき、『類題和歌鴨川集』第四編にあたる「四郎集」の編集を行っており、本書は同年十二月に刊行されている。また『詠史歌集』（嘉永五年序、同六年刊）の刊行も決まっているようである。

③は嘉永六年八月晦日付古川松根宛長沢伴雄書簡である。前年の書簡で言及されていた『詠史歌集』は刊行され、古川松根の許に届いている。四行目に出てくる「詠史集并外式部」は次の④の冒頭にある「詠史四部 野史詩歌式部 落葉にしき壺部」を指すと考えられる。

③と④を合せて考えると、両者の交流がよく見えてくる。長沢伴雄が嘉永六年四月に書いた書簡を古川松根は同年六月に受け取り、その後松根はその返信を六月二十七日付で長沢に送った。それを受け取った長沢が同年八月晦日付で返信したのが③である。両者はかなり頻繁に書簡の往復を繰り返していたと考えてよいだろう。

書簡中に見える「一位殿」は紀州藩前藩主徳川治宝のことで前年（嘉永五年十二月七日）に没している。紀州藩では治宝没後に治宝派の肅清が行われており、長沢伴雄もその中（治宝派）に入っていることを自覚している。

また本書簡とともに長沢伴雄『挫夷私説』（嘉永六年六月奥書）を送っている。本書は一種の海防策を述べたもので、同年六月のペリー来航に触発されてなされたものであろう。この後、より大部な『挫夷本論』（嘉永七年六月奥書）が書かれることになるが、まずは長崎を警固していた肥前の古川松根の意見を

聞いてみたいということでききたばかりの本書を送ったのかもしれない。また『玉銚』も皇国学の在り方を提案するもので現在は台湾大学図書館長沢文庫に収められている。

④では『詠史歌集』第二編も企画されていることがわかる。書簡中の今泉子は今泉蟹守と考えられる。今泉蟹守は、文政元（一八一八）年三月一日生、明治三十一（一八九八）年二月七日没、八十一歳。佐賀藩士。通称隼太・早太、名則文。御蒼生・鞆屋（鞆の屋）・梨樹園・拙隣居・桜処と号す。佐賀の歌壇を代表する歌人六百人以上の歌を集めた『類題白縫集』（全十一編二十四冊）の編者である。

また「野史詩歌」は『野史竟宴詩歌』（飯田忠彦・藤原長経・鈴木連胤ら著、一冊、嘉永四年刊）で長沢伴雄も序を寄せていることから仕方なく紹介しているようである。書簡で「野史作者は希有ナル仁物」と長沢が持ち上げている人物は飯田忠彦である。

「落葉錦」は『落葉の錦』（本居内遠編、二巻二冊、嘉永四年刊）は本居宣長の遺墨を版にしたものである。本居大平門の長沢伴雄にとっては一門に関する書籍ということでの販売に一役買っているかというところでもなく、「実ニ迷惑」しているとして述べている。ただこれも松根に買ってもらうための方便かもしれない。古川松根にとつてはこれらを購入することで書籍以上に得るものがあつたと考えられる。たとえば、長沢編の『類題和歌鴨川集』『詠史歌集』などへ自分の門人の和歌を入集してもらえないかもしれない、あるいは⑥にみられるような門人の上京に際しての便宜が得られるかもしれないなどである。当時の学者たちの持ちつ持たれつの関係が垣間見える書簡といえる。

⑤は嘉永五年七月二十一日および八月七日付長沢伴雄宛古川松根書簡の返信で同年八月二十八日付古川松根宛長沢伴雄書簡である。松根からの書簡には松根が長崎へ赴いたこと、萩の近藤芳樹が佐賀へ来たことが伝えられている。芳樹の佐賀来訪は同年四月である。長沢は本書簡執筆時の八月二十八日時点では在京しており、『詠史歌集』の製本間近であることが伝えられている。また七月二十二日の京都の洪水についても報告している。

⑥は嘉永五年八月二十六日付長沢伴雄宛古川松根書簡に対する長沢伴雄の返信で、同年九月二十六日付古川松根宛長沢伴雄書簡である。

佐賀の枝吉次郎（のちの副島種臣）の上京について長沢は松根の依頼を承諾し、他にも飛騨高山からの書生がいるので寄宿なども支障はないとしている。長沢は松根から陶器の盃台を受け取っている。

尚、本資料群に施される朱筆は、⑥から判断すると古川松根自筆の可能性がある。

〔亀井 森〕

二、小車社関係歌合集

近世の歌合については近年注目が増えているようである。そこで本書でも、小車社の詠歌実践に迫るための資料として、野中烏犀圓文庫資料と、佐賀県立図書館所蔵伊勢町杉野家資料から、歌合の写本を紹介したい。ものによって参加者が異なっており、諸資料を比較することで、歌人達の交友関係の重なり方の如何も明らかにできよう。

翻刻にあたっては、原則として通行の字体を用い、句読点を

補った。朱書きはゴチック体で表記した。

*杉野竹弘関係歌合集

ここで取り上げる杉野家は佐賀の伊勢神社の社家であり、旧蔵資料が現在、佐賀県立図書館に所蔵されている。この家の歌人としてもっとも有名なのは、二条派の教えを受けた元禄期の富本梅坡こと杉野竹徳（一六六四〜一七一三）であろう（『佐賀の文学』新郷土刊行協会、一九八七）。幕末期に活動した杉野竹弘についても、『小車集』や後で見ると南里有隣が編んだ『本教館詠草』等にもその名が見られ、和歌資料が数多く残されている。以下、中山成一の調査成果に従って本書に収録した歌合写本の書誌情報を掲げる。

①外題打付書『嘉永五年詠草合』（伊杉 19-10245）写本一冊、共紙表紙、墨付十二丁、27.4cm×18.7cm。詠者は一径・安清・道晁・精雄・興宣・俊郷・大秀・春里・春樹・竹弘。判者不明（判詞朱筆）。

②外題打付書『安政二年詠草合』（伊杉 19-10251）写本一冊、共紙表紙、墨付八丁、26.8cm×18.5cm。詠者は維足・久延・厚道・竹弘。判者不明（判詞異筆）。

③外題打付書『六十四番歌合』（伊杉 19-10255）写本一冊、共紙表紙、墨付二十六丁、31.0cm×21.5cm。詠者は孝儀・嘉保・皆江・万寿子・知愛・豊苗・芳洲・宗肅・嘉樹・千竹・柏子・磯子・穂主・竹弘・満春。無名で藩主鍋島直正も出詠している（中山成一「幕末佐賀歌壇と杉野竹弘」第十二回地域学シンポジウム「幕末佐賀の歌人たち―直正と小車社」二〇一八、において報告されている）。判者は古川松根。同内容の写本（伊杉 19-10724）が残る。

④外題打付書『三十六番詠草合』（伊杉 19-10493）写本一冊、共紙表紙、墨付二十丁、23.0cm×16.2cm。詠者は嘉樹・豊苗・信之・孝儀・芳洲・維足・嘉保・宗肅・穂主・竹弘・正熙・通清。判者は古川松根。表紙に「小車社」と墨書。

⑤外題打付書『七十二番詠草合』（伊杉 19-10495）写本一冊、共紙表紙、墨付三十八丁、22.5cm×15.0cm。詠者は竹弘・嘉保・芳洲・信之・維足・通清・宗肅・嘉樹・正熙・豊苗・穂主・孝儀。表紙に「小車社」と墨書。

*『三十六番歌結』

同書は野中烏犀圓文庫所蔵（B106）の写本である。題は外題打付書による。共紙表紙の一冊で墨付二十丁。詠者は信親・維足・古水・広雅・千竹・妥喬・安貞・ゆふ・清石・鶴年・穂主・宗肅。判者は古川松根。先述の野中家に残された写本であるこちらは、古水こと元右衛門や安貞など、同家の人物が参加した際の記録になる。

三、南里有隣関係歌集

松根と並ぶ小車社の中心人物であった南里有隣（一八一二〜一八六四）が、桂園派の歌人であるとともに、藩校や神職向けの学校で国典を教えた復古神道家であったことは、総説において述べたところである。彼が貢献した「本教学の館」あるいは「神学寮」における教育の実態については不明な点も多かったが、共同研究の過程で、佐賀県立図書館には『本教館詠草』と題する南里有隣の写本群が確認できた。同書を見ると、小車社で活動したことが確認できる人物のほか、神学寮周辺で学んだことが知られる神道家の作品が数多く確認できる。彼らが神学

上の影響を受けた平田篤胤の家塾気吹舎とは異なり、本教館の学習課程においては詠歌に意味が与えられていたことを示す資料だと言えよう。なかでも龍種(副島種臣)、(西川)須賀雄、(岡)吉胤、(糸山)貞幹など、京都に国学修行に赴き、維新後には政府に登用される国学者の名は、注目に値しよう。

翻刻にあたっては、原則として通行の字体を用い、歌番号を付した。書誌情報は左の通り。

①外題打付書『本教館詠草(一)』(図45-155)写本一冊、別表紙、墨付三十九丁。表紙に「安政七年寅九月ヨリ」「安政二年卯五月迄」と墨書。

②外題打付書『本教館詠草(二)』(図45-156)写本一冊、別表紙、墨付八十九丁。表紙見返しに「佐賀人々か詠歌集」と異筆の書入れあり。

③扉題『万延元季詠草(三)』(図45-157)写本一冊、別表紙、墨付六十六丁。扉に「設塾館」と墨書。

〔三ツ松 誠〕